埼玉新聞

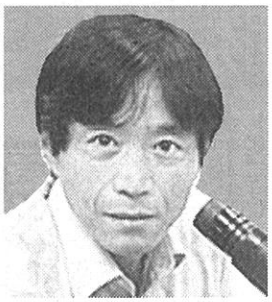
（7）　経済　2016年（平成28年）9月28日（水曜日）

サイ・テクこらむ　知と技の発信　【279】

埼玉大学・理工学研究の現場

「日本の河川景観の変遷」

浅枝 隆 教授



（あさえだ・たかし）53年生。78年東京大学大学院修士課程修了。工学博士。東京大学助教授等を経て2000年より現職。専門は、河川、湖沼の生態環境。著書「図説生態系の環境」など。

■本来の姿

日本の河川の風景は、有史以来変化を続けている。戦後から高度成長期を生きてきた人には、大きな川の両岸には河原が広がり、石がごろごろしていたという記憶がある。しかし、20代以下の人の感覚では、川の周りには河川敷はあるものの、そこには草や木が生えている。実はそのために、河原を生活の場にしてきた動植物が姿を消し、また、洪水時には樹木が障害になって洪水流が流れにくくなるといった問題が生じている。

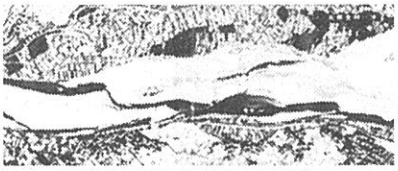
それでは一体どちらが本来の姿かというと、実はあまりよく分かっていない。まず、なぜ近年、河原に植物が生えだしたのかという理由を考えてみよう。写真は荒川で記録的な洪水があった2007年の3年後の風景である。手前には上流から流れてきた礫（こいし）が堆積、向こう側は地面の表面が洗掘した。

3年が経過し、礫の堆積した場所にはほとんど植物は生えておらず、洗掘が生じた場所は大量の植物で覆われている。河原では、洪水によって、礫が流下、堆積することで植物の繁茂が抑えられる。

2007年の洪水の3年後

■礫の減少

さて、次の二つの写真は、荒川中流部の戦後すぐと最近の写真である。以前は、河道の中は大量の礫で覆われているのに対し、最近はそうした様子は見られない。ここ70年の間に河道の中の礫が減少し、洪水があっても、礫が堆積することがなくなり、植物が減らなくなった。これが河原に植物が増えた原因である。



㊤1947年㊦2015年

それではなぜ、礫が減少したのか。高度成長期の砂利採取とダムや堰の建設による礫の捕捉、さらには山の樹木が増加し山から土砂の流出が減ったことが大きい。砂利採取やダムや堰の影響は、いずれも負の遺産として考えられるものの、山の緑化はむしろ、正の効果を期待してのものだけに面白い。

最後に、それではいつから山に木がなくなったかといえば、江戸時代には既にほとんどなくなっていた。江戸時代に描かれた浮世絵をみると、山は草原、川には河原が描かれている。樹木が燃料に利用されたためである。昔あった河原の風景も、実は人工的なものであったということである。

埼玉経済

企業、団体、商店街などの話題や情報をお寄せください
TEL 048・795・9161 FAX 048・653
✉keizai@saitama-np.co.jp